

Anthropologist at Work にみるルース・ベネディクトの肖像

その他のタイトル	Understanding Ruth Benedict through Anthropologist at Work
著者	福井 七子, 菊地 敦子
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	9
ページ	1-28
発行年	2013-10
URL	http://hdl.handle.net/10112/9625

Anthropologist at Work にみる ルース・ベネディクトの肖像

Understanding Ruth Benedict through Anthropologist at Work

福井七子 菊地敦子
Nanako Fukui Atsuko Kikuchi

This paper is an attempt to shed light on Ruth Benedict's personality by analyzing her autobiography, her research, her journals, diaries and correspondences. In Section 1, we introduce her autobiographical memoirs through its translation. In Section 2 and 3, we examine her internal resistance against what were the absolute values of her days. We then examine how she turned her internal turmoil into her drive to change those values. As part of this process, Benedict looks at what is considered "abnormal" in society. Even though Benedict established herself as a cultural anthropologist through her work in finding patterns of culture, this topic of "abnormality" continued to run through her research. The frustration and internal turmoil that we found in her autobiography, poems, journals and correspondences suggest that she was constantly looking for an outlet for her frustrations. In the end, she found research into the "abnormal" to be the outlet that she was looking for.

はじめに

アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトは、初期にあつては滅び行くネイティブ・アメリカンの文化研究に始まり、後には文化とパーソナリティ研究のパイオニア的存在として今日もその影響は否定することはできない。また、ベネディクトに関する著書は、国民性研究、とりわけ日本文化論に至っては枚挙にいとまがないほど多く、また最近ではフェミニズム（Lapsley：1999）や人種差別に関連するものにまでおよび、その分野は多岐にわたっている。ベネディクトほど多角的に研究されている女性も少ないのではないかと思う。ベネディクトに関する研究はまだ進行中である。

もう3年ほど前にならうか、菊地敦子先生と私はひとつのプロジェクトを開始した。それはルース・ベネディクトのアンソロジーともいべき *Anthropologist at Work* 『文化人類学者の仕事』（仮題）の翻訳をすることであった。原著はベネディクトが1948年に死亡して10年後に、彼女とさまざまな意味で関係があつたマーガレット・ミードによってまとめられたものである。

ベネディクトの日記、詩、その他書簡集も含むもので、ルース・ベネディクト研究者にとって必読の書となっている。にもかかわらず、これまで日本語に翻訳されることはなかった。マーガレット・ミード自身も『人類学者 ルース・ベネディクト——その肖像と作品——』英文のタイトル *Ruth Benedict* として1974年に一冊の本にまとめているが、この *Anthropologist at Work* からの参照がその中核を成しており、さまざまな箇所でも引用され、ひとつのベネディクト像を描いている。

本著はベネディクト理解において不可欠の文献といえるだけでなく、ミードによるベネディクト理解を知る上でも重要である。特に、ベネディクト自身の論文のみならず、彼女が苦悩していた頃に模範とすべく研究した女性史などは、興味深い作品といえる。現在ベネディクトの関連文書はヴァッサー大学に保管され、稀覯書に分類されている。コレクションの文書すべてが本著に反映されているわけではない。ベネディクトの死後、遺言執行人は文化人類学者ルース・ヴァレンタインであった。ヴァレンタインをベネディクトは「ヴァル」と呼び、親密な関係にあった。そしてマーガレット・ミードは文書の管理を行っていた。ミードの死後はミードとグレゴリー・バイトソンの娘であるキャサリン・バイトソンが管理している。ヴァッサー大学にある文献はベネディクト研究にとって重要かつ貴重な第一次資料であるが、*Anthropologist at Work* を通して、断片的な文献もひとつに結びつき、当時のベネディクトと親交のあった人たちとの関係や分野を知る上でもなくてはならない本と言えよう。散逸した資料をできうる限り集めるという作業の難儀さは、ベネディクトの人生の多様な側面を表しているだけでなく、複雑にからみあった人間関係や当時のアメリカのアカデミズムの一面を知る上でも重要なものといえよう。

本著を翻訳して感じられることは、ミードによって引用された箇所は、時にはミードの主観によるのではないかと思われる箇所もあり、またミードとベネディクトの関係についても必ずしもミードが思うほどのものであったのかどうかという疑念が生じる箇所もある。しかし、ベネディクトの生涯にわたる著作を知るうえで、この本の価値は疑う余地はないであろう。クリフォード・ギアツも本著を評して、「……聖人伝のおもむきさえ漂う書物である……」と書いている。(ギアツ：1996：181、Geertz：1988：126)

私たちはいかなる先入観も持たず、本著に虚心坦懐に向き合い、翻訳することに努めた。これは翻訳者に求められる姿勢だと信じている。そして翻訳過程で生じた疑念や感想を書きとめることにした。翻訳が終わった段階で、その時に生じた疑念を翻訳のあとがきで残すべきか否かは決定することにしていく。ミードによれば、ベネディクトが残した論文や著書は多くないとある。そうかもしれない。しかし、翻訳のプロセスで私たちが感じたのは、彼女が生きた時代、その時代に抗いながら自分の道を模索していった過程の激しさであった。ベネディクトの模索期間は、私たちが生きる現代と彼女の生きた時代のギャップを感じさせるとともに、ある

意味で共通の悩みなのではないかと思っている。ベネディクトが抗い難い時代の軋轢に悩みながら、いうならば当時の社会の絶対的な基準や常識と考えられていたことに対してどのように対応し、諸問題をいかにして切り崩していこうとしたのか、彼女の底知れぬ強さと忍耐の過程は猛烈な模索期間であるとともに、彼女の個を求めていくことに繋がっていくことでもあった。

マーガレット・ミードとベネディクトは一時期、同性愛の関係にあったことは事実である。しかし、その関係は長くは続かなかった。本著を翻訳している過程で、私たちは何度も同性愛やフェミニズムについて討論した。同性愛という観点からベネディクトをとらえ、書かれた著書もある。それも研究として可能かもしれない。しかし、ベネディクトの書いたものに触れていると、そのように結論を出すのは少し短絡的ではないかと感じさせられる。ベネディクトは理屈っぽく、幼いころには自分自身をコントロールできず、激しい痲癢に悩まされていた。自分の気持ちを理解してくれる相手を希求していた。ミードとは違い、ベネディクトは自分の気持ちを率直に外に出すタイプの人ではなく、内にこもっていくタイプの女性であった。肉体的なハンディ、つまり片方の聴力が極端に悪かったことも一因かもしれない。しかし、それだからこそ、一時期ミードがベネディクトに果たした大きな役割は、重要なものであったことも想像に難くない。聞き取れない講義をミードの援助によってハンディを軽減されたのも大きな助けとなったであろう。性格においてもミードとは異なるが故に、惹かれるものがあつたのも事実であろう。ミードにとっても、ベネディクトは魅力ある人間であった。

自分自身の可能性を求めて、ベネディクトは一時期詩作にふけり、詩を書くことで自分自身の解放を考えていた。それは、言語学者エドワード・サピアとの膨大な書簡からも知ることができる。彼女はサピアの才能にひかれていた。しかし、サピアとは男女の関係ではなかったであろう。ミードもある時期詩を書いていた。そしてサピアともベネディクトを通して知り合った。ミードがサピアやボアズと知り合ったのはベネディクトを通してであり、ある時は子弟の関係になり、またある時は男女の関係にもなっていた。サピアとは後者の関係であったと思われる。サピアはサピアの妻の死後、ミードと結婚することさえ考えていたようである。（カフラー：1993：291）

本著の編集はマーガレット・ミードによるものであり、また解説のいくつかは彼女の手によるものではあるが、それでもミードの思いもかけない心情が吐露された部分はある。そうしたこともきちんと正確に読者に伝達したいと思っている。

本論文では、ベネディクトの葛藤、模索、そして一筋の光を見出すために猛烈に悩み、苦しむという点に重点を置き、模索期間を通して彼女がどのような悩みを抱えていたのかを彼女の日記や書簡などの部分を通して紹介したい。そこで、第一章では彼女が遺した伝記ともいべきものを翻訳し、彼女の育った環境、そして父親への想いの強さなどを紹介する。2章では彼女が一時期熱中した詩作、ことに詩作に関しては言語学者として今日確固たる地位を築いたエドワード・サピアと交わされた文通などを翻訳紹介し、若干の解説を加えて考察したものであ

る。そして3章では彼女が自分の居場所を求めて模索していく過程を中心に、彼女がどのような変遷を経て、文化研究に至ったのかをサピア、ミードとの人間関係にも焦点を置いて書くことにした。本論文は翻訳を中心としたものであり、菊地先生と一言一句相談の上で訳し、また感想をお互いに述べることで成立した共著の論文であることをお断りしておきたい。

本論に登場する4人の写真を紹介しておきたい。一つ目はルース・ベネディクトの写真で、この写真は1931年のものである。二つ目はマーガレット・ミードの写真である。彼女の気さくで、アプローチブルな様子がよくあらわれている。三つ目はルースとミードの師匠であり、アメリカ文化人類学の父とも呼ばれたコロンビア大学の教授フランツ・ボアズの写真である。コロンビア大学において文化人類学の中心的な人物であった頃の写真と思われる。年齢を重ねた頃のものとは少なく、また彼は1915年の癌の手術によって部分的顔面麻痺を患っていたようだ。(カフリー：1993：151) 三つ目はルースやミードとも密接な関わりのあった言語学者であり、詩人でもあったエドワード・サピアである。彼もボアズに師事し、シカゴ大学、そして後にはエール大学の人類学科長を務めた。彼は人類学と言語学を結ぶ研究のパイオニア的存在であり、教え子にはベンジャミン・ウォーフがいる。



①ルース・ベネディクト



②マーガレット・ミード



③フランツ・ボアズ



④エドワード・サピア

1 章

これまでベネディクト研究において部分的には引用されていたが、全文の翻訳は未発表の彼女自身が書いた伝記を翻訳し、1章で紹介することにした。彼女の幼い頃の思い出、感情の起伏の激しさ、複雑さが感じ取れるものである。The Story of My Life ……「私の人生の物語 ……」(*Anthropologist at Work*、以下 *A.W.* とする。 *A.W.* 1) はミードの勧めもあって書き始めたもので、途中で終わってはいるが、彼女の心情や人生観を知る上で、重要な文献であることは間違いないだろう。彼女はある期間、いくつかのペンネームを使って詩を書き、また死に対する強い憧れと恐怖を持っていたが、そうした理由もこの伝記から垣間見ることができる。

私の人生の物語……

私の人生の物語は、私が21ヶ月のときから始まります。その時に父親が亡くなりました。その年の3月に父親はトリニダードから帰ってきました。そこで父は、自分の命を食いつくしている熱を克服しようとしたのですが、その試みは空しくも10日後に亡くなりました。父は一年前から病に伏しており、ある手術をしている時に、このまれな病気にかかったと言われていました。父は若い外科医で、自分の仕事と研究に情熱をもっていたのですが、死ぬ9ヶ月前にニューヨークでの診療所を閉めなければならなくなり、私と母といっしょに自分の祖父の農場に移らなければならなくなりました。父がどんな人だったかはほとんど覚えていませんが、私の子どもの頃、そして今でも、父が私に与えた影響は大きいものでした。もしかしたら、私は父の思い出を頭に残していたのかもしれませんが。なぜなら私が子どもの頃、家のなかにある或る椅子を、他の誰も父と関連づけなかったにもかかわらず、私は「お父さんの椅子」と呼んでいたのです。私がなぜそう言っていたのかはわかりませんが、もしかしたら父が最後の10日間で一度、起き上がることができた時、その椅子に座らされたからかもしれない、と言われていました。もし私がその時のお父さんの顔を頭に焼きつけていたとしたら、後に多くの不可解なことの説明がつきます。私がかすかに覚えている父の顔は健康なときに撮った写真（その時代に流行っていた丸いひげやもみあげをした）とは全く違うからです。私が覚えているのはそういう顔ではなく、疲れた顔が病いで透きとおりと、とても美しく輝いている顔です。父が美しかったことは誰もが認めています。私に力を与えるそのような顔が、父と関係あることは、ある日ボストン美術館へ母を連れて行くまで気がつきませんでした。私は大好きなエル・グレコの修道士オルテンシオ・フェリス・パラバシーノ（Fray Felix Hortensio Paravicino）を見せるために母を美術館に連れて行ったのです。その絵を発見してから私は、色々な方法を見つけてはその絵をボストンまで見に行きました。その絵に対する私の感情は、画家の素晴らしい完成度の高い価値を認めるというだけでは説明がつかないほど強いものでした。私がボストン美術館を訪れる理由は、描かれた男の人に対する友情と愛から成るものでした。私はいつも彼のことを「私

のもの」と呼んでいました。私が結婚して何年も経ったある日、母といっしょにボストンにいました。母は絵画のことは何も知らず、私が好きなエル・グレコの絵は彼女にとっては何の意味もありませんでした。しかし、この肖像画が展示されている広いギャラリーに到着すると、それが「私の絵」だとは知らず、母はその肖像画に向かいました。なぜだかわかりませんでした。母は私に、「これはあなたのお父さんよ、亡くなる少し前のお父さんよ。その時のお父さんがどんなだったか写真はないの、でもこの絵を見ればどんなだったかわかるわ。」と言いました。

何ヶ月も前に、叔母は私が心に描いていた父の顔の思い出が本物であることを示すようなことを言いました。私が覚えている父の顔は、病気によって変貌していたかと思っていたのですが、その変貌は死によるものでした。母は、父の死を嘆き悲しみました。二人の赤ちゃん、一人は3ヶ月の赤ちゃんを残して死んだので、母は私に父の顔をどうしても覚えておいてほしかったのです。父の棺のところに私を連れて行き、ヒステリックに泣きわめき、父の顔を記憶に留めるように私に言ったのです。私はこの経験を覚えてはいませんが、もしその記憶がおさえ込まれてしまっているとしたら、母の啜り泣きが今でも私に与える影響を説明することができます。母は父の死に対する悲しみを儀式化し、毎年3月に教会で泣き、夜はベッドで泣きました。そのたびに、それは私に同じ影響を与えました。それは、耐えられない悲しみと、自分では抑えられない物理的なふるえで、時にはオーガズムのような硬直に達しました。それは母に対する愛の表現ではありませんでした。時には母がかわいそうだと思うことはありましたが。母の啜り泣きがどんなに破壊的影響を与えたかは、私にとっては「幼児期に抑圧された思い出」との関連でなければ説明できないものです。その場面で母は私に強制的に父の顔を記憶に刻み込ませようとし、私は父の顔を愛するがゆえに母と母の悲しみを極端に否定したのです。

確かに私はかなり早い時期から二つの世界を持っていました。父の棺があった悲劇的な場面でその一つが生まれたのかどうかわかりませんが、その二つのなかの一つは、父の世界で、それは死の世界で、美しいものでした。そしてもう一つの世界は、混乱の世界で、私が否定した爆発するような母の号泣の世界です。私は母を愛していませんでした。母の悲しみのカルトに嫌悪感を抱き、小さいことを気にして心配する母を嫌っていました。しかし、私はいつでももう一つの世界に引きこもることができ、そこには父がいました。私は穏やかで、美しいものを父に結びつけました。よく覚えている初期の光景の一つに、祖父の部屋で家族みんなが集まっている場面があります。壁にかけてあるキリストを見て、(それは「ピラトの前のキリスト」だったのですが)、私はそのキリストが父だと言いました。父の名前が挙げられるとすぐ、悲しみに突入する母、神に対する私の冒瀆、あるいは私の幻想のナイーブさに、祖父の顔はショックでゆがんでいました。

死に対する私の反応は、父に対する私の気持ちの側面でしかなかったと思います。私が4歳の時、祖母に連れられて赤ちゃんが死んだばかりの人たちが住んでいる丘の上の家に行きました。それは農家ではごく当たり前の習慣で、私たちは当然のように死んだ赤ちゃんを見ました。堅苦しい客間に横たわる赤ちゃんの透き通った美しさをはっきり覚えています。これまで見たもののうちで最も美しいもののように見えました。その美しさが、薄汚い兄弟、姉妹、そして疲れ果て薄汚れた母親と対照的だったので覚えています。彼らが死んだら、彼らも赤ちゃんのように美しくなれるのでしょうか。しかし、彼らは死んではいなかったのです。

死に対するこの物理的な感情は、私のなかにいつまでも存在しました。自分が死んで、横たわっている姿を昔は今より頻繁に考えたものでした。それはまともに生きた人に許されることだと信じていました。しかし、嫌悪感とつまらなさばかりが溢れている顔は、たとえ死んだとしてもあのように特別美しいものに変化することはできないと思っていました。今でも自分が愛した人の死顔が見られなければ、裏切られたような、だまされたような気持ちになります。時には死顔が期待はずれのこともありますが、ほとんどの場合思ったとおりでした。スタンレー（訳者注：ルース・ベネディクトの夫）のお父さんはいつもしいたげられ、不平ばかり言っている、施設にいる姿しかみることがありません。しかし、彼が棺に入っていた時、私は真に彼をみることができました。彼は、ほかのすべての人よりも優っていました。あのような死顔が得られて喜んでいるに違いないと思いました。そういう思いをもったのが私だけだったということが理不尽のように思えました。

私が子どものときに知ったこれら二つの世界は、あらゆる方面に広がっていきました。大切な瞬間のための一人の世界、貴重な瞬間のなかに私は幸福を見つけました。これらの大切な瞬間は、かけがえのない私の宝でした。その大切なときを得るには、いくつかの方法がありました。特に覚えているのは、寝ている子猫をひざに抱え、木造の家の階段に座り、東の丘を眺めながら家族のために豆むきをしている時です。13人～14人の食事を作らねばならなかったので、時間がかかりました。みんなが台所で忙しくしている時、私は玄関前の踊り場で、安らかな時間を過ごしていました。普通の、混乱にあふれている世界に戻るのはやっかいです。手をつけられない私の痲癩の発作に、家族はいつも手を焼いていました。どうして痲癩を起こしているのか、家族にはわからなかったのです。そのため、私を無視して、自分たちの仕事を続けました。私は自分に対して、あるいは近くにいる人たちに対して暴力的でした。もちろんいつも私は罰せられ、みんなを泣かせました。でも痲癩の発作に対する罪悪感はありませんでした。私が犯した罪は、大切な瞬間を壊し、そのような瞬間が二度とこないように、自分の暴力によって自分を泥沼に落とし入れたことです。確かにそのような罪は犯したのですが、そのような罪は自分に対する罪で、社会的な罪だとは思いませんでした。

自分だけの楽しい世界のなかで、私はいくつかの楽しいゲームをして遊びました。そのなかで一番よく覚えているのは、西の丘を越えたところにある美しい国に家族が住んでいて、そこに私と同じ年齢の女の子がいるゲームです。この空想の遊び友達と彼女の家族は、言い合いや相手に対する非難などせず、穏やかでやさしい生活をしていました。この女の子と私は手を取り合って、丘の上の素晴らしい国の、ほかでは経験できない美しさを探検して回りました。5歳くらいの頃、母が西の丘まで遠出できると判断し、叔母たちと私を丘まで連れて行きました。丘のてっぺんまで行って、そこから景色を眺めるという約束でした。子どもの私にとってはかなり急な坂を上って、草原の端にたどり着いた時、とても暑くて疲れきっていました。そして私たちはそこからなだらかな丘の向こうにある、「ジョージおじさんの牧場」を眺めました。そこは、私が想像していたような世界ではなく、全くロマンチックではないありふれた地域でした。私たちは休みのたびに車で峡谷を抜けて、ジョージおじさんのところに行きました。それだけのことです。丘の向こうの想像の遊び友達とは、二度と遊ぶことはありませんでした。

それ以降、それまで頻繁にしていた家出は二度としませんでした。私の幼児期の家出は、私の癩癩の発作と同様に、家庭内の罪と考えられていました。実際には2回しか家出したのを覚えていませんが、どちらも大事でした。最初の家出はその後にジレンマを感じたからよく覚えています。私が3～4歳の頃、母が用事で3～4日外出するので、その間絶対に家出をしないように約束させられました。でも私は家出をしました。母が帰宅してから約束を破ったことを母にとがめられましたが、私はその理由を言うことを拒否しました。母は私が話しをするまで家に閉じ込めると決めました。でも私を家に閉じ込めてもあまり効果はなく、一日一日とそれは延長されました。話しをしさえすれば、罰から解放されるのは確かでしたが、私は母に話しをすることはできませんでした。今振り返って考えると、家出と家出にまつわることは、私の別の世界であり、別の世界について母に話すことはできませんでした。家族のみんなが私に手を焼きました。ためしに私が石油缶の栓を開いて木の床の小屋にそれをまいた時、母は罰することをやめました。私は何をしでかすかわからないような子だったので、みんなに迷惑をかけるだけでなく、悪意に満ちているかのような存在でした。ある朝、母は私を一階の寝室に連れて行き、私が話しをするまで何も食べてはいけないと言いました。その時の自分の苦しみをよく覚えています。家族は正午に食事をし、午後の時間が経っていきました。みんなは夕食を食べ、電気が灯されました。母は私の隣に座って、ほぼ一日待ちました。やっと私は、話し始めました。その解放感たるや、まるで本当に酔ったような気持ちでした。今まで成し得なかった最も困難なことを成し遂げたのです。母は私を食堂に連れて行き、ランプの光のもとで二人だけで食事をしました。

自分のことを話したくないと考え始めたのは、6歳のころでした。私は藁の上で遊ぼうと納

屋に向かったのですが、途中で私の隠れ場所であった藁の乾燥小屋に行きました。大きな木の梁の下の暗闇の人目につかない隠れた藁のなかに空洞を作っていました。そこは、かくれんぼをするときの乾燥小屋で、私はその暑くて暗い場所に独り籠もりました。汗で濡れた肌に藁のくずがくっついたものです。子どもが藁の山で遊びまわるのは当たり前でしたが、家族は、藁の暗い穴でじっとしている私を理解することはできませんでした。私のお気に入りであったのは、そこが「私の墓場」だったからだと思います。もし家族がそれを知ったら絶対に許しはしなかったでしょう。ある日、光り輝く幻想のかがやきのように、私にある考えがひらめきました。自分を友だちにすればいつでも友だちはそばにいる。そして、自分にとって大切なことを誰にも言いさえしなければ、誰もそれを私から取り上げることはできないということです。35歳になるまで、私はこの基本的考えをもとに生きてきました。35歳になった時、自分であることを、絶えず秘密にしておくのが大変なことだと気がつき、人が自分のことを知ったとしても、それを受け入れるか否かは自由だということを知りました。しかし、35歳まで自分にとって大事なことは、他人が知れば傷つくか、口出ししてくるに違いないと考え、その両方を私は避けたかったのです。私の死に対する考え方、私のペンネーム、私とスタンレーの関係、それらすべては、私とその藁置き場で悟った人生のルールなしには理解することはできません。

二回目の家出は、私の人生のルールに条項を追加するものとなりました。その補足事項は、私が人生のルールをはっきり決める前に明確になりました。その時、母は私が草むらで遊んでいると思っていました。それは許されていましたが、実際には線路の向こうにある遠くの家を目指していました。そこに着いた時、祖父は藁を乾燥させていました。私が出たことは知らなかったのです。祖父は他の誰よりも私を守ってくれました。祖父はりっぱな人で、力強く、穏やかな動きをする人で、朝ごはんの時には、毎朝家族の祈りをリードする長老でした。祖父が祈りの中で、絶えず使っていたフレーズは、「神が私を光に導き、その光は完璧な光になるまで、どんどん強くなる」というフレーズです。痲癩の発作を起こした時に、家族が私に与えた罰は、意識のなかには残らなかったのですが、祖父がその時に椅子から立ち上がって納屋に行ってしまったのは、つらい思い出です。それ以降、祖父が家にいる時は痲癩は起こしませんでした。

その日、祖父は私を寛大に家に迎え入れてくれました。干草を運ぶワゴンに私を乗せ、納屋に連れて行き、甘いにおいがする草を納屋に放り入れていきました。牛のミルク搾りの時には空っぽのワゴンに乗って遊びました。言い出しにくかったのは、私が祖父の家に来ていることを母は知らないと言うことでした。祖父は微笑を浮かべ、私を見下ろして言いました。「彼女が聞かなければ言わなくてもいいじゃないか。」それは私の人生のなかで最高のひと時でした。私は祖父と秘密を共有し、祖父も私と同じ位喜んでいました。そのあと、私は草むらの方から家にぶらぶらと帰り、母はこの時間まで草むらで遊んでいたの、と聞きました。私は「そうよ」

と言ってそのことを気にも留めませんでした。気に留める必要がないと思っていたからです。でもその晩、ミルク搾りを終えて夕食を食べに来た祖父は、私を抱き上げて、「お母さんは聞いた？」とそっと私にささやきました。私は何と答えたらよかったですでしょう。「聞かなかった」と言うと、祖父は私に微笑みかけました。でも私は夕食を食べませんでした。私は祖父に嘘をついたのです。それは重要なことでした。祖父は私の側の世界にいました。私が選んだ忠実なる人だったはずですが、私は彼を裏切ったのです。考えていた以上に人生は複雑で、私はどうしても何らかの方法を見つけて、祖父に嘘をつかなくてもいいようにしなければならないと思いました。

倫理の複雑さについて学ぶことによって、否応なく、あるステップをとらざるを得なくなりました。それはとても重要なことだったように思います。マージェリーと私は、母の膝の上でお祈りをしたのですが、私が最も気になったフレーズは、「我らの罪をゆるしたまえ」でした。私はそれを文字通りにとって、これを言うことですべてが白紙になると思っていました。毎晩、私はマージェリーが白紙から始めるのと同じ位の白さで、もう一度スタートできると思っていました。何の罪の意識があつて、そうなったのか覚えていませんが、初めてベッドから出て、「我らの罪をゆるしたまえ」という部分はずして、祈りをもう一度言ったことがありました。それは確か6歳になる前のことです。その祈りをもう一度言ったのは、12歳を過ぎて大人になった頃です。私は許されてはおらず、また自分の罪に対する清教徒的な重荷や執着などはありませんでした。ただ祈りを言わないことによって、自分の罪に対する責任を負うということだったのです。その部分を私はわざと、「罪を持っている人たちを許します」と言い換えて言いました。その方が人間の寛容さであり、すべてを白紙に戻すというものとは異なっていたからです。私はこのことを誰にも話すことなく、すべての権力者が、私とは反対の意見だなどとは考えもしませんでした。その頃、私はまだ自分が正しいと思うことを超越するような権力などないと思っていたからです。

妹が私の人生にほとんど影響を与えていないということは、興味深いことです。私たちはいつも一緒でした。妹は私とは18ヶ月しかかわらず、ふくよかで美しい子で、何の問題も起こさない子でした。遊び相手としては、彼女はすぐに泣き、よくからかわれていましたが、私はこういったことが嫌でしたが、姉としてまっとうな役割を果たしたと思います。癩癩の発作を起こした時、妹をときどきぶったので、妹を傷つけるのではないかと母は心配していました。でも絶対にそんなことはなかったと思います。妹は家族からひいきされており、みんなに好かれ、家族は妹の美しさをいつも話題にしていたのですが、私は妹に決してやきもちを焼きませんでした。私が14歳の時、ある訪問者が私を美しいとコメントした時、何と不思議なことを言う人だと思ったのを覚えています。その後このようなコメントは30歳になるまで、言われたことはあ

りませんでした。自分に関するコメントを私は嫌い、美しいとか醜いとかは、私には関係ありませんでした。それは「私の」世界に属するものではなかったのです。

学校に行き始めて最初の何年かの間に、私の周りで起きたことはあまり覚えてはいません。5歳の時、母がノーウィッチで教師の仕事を始めました。それは農場から3マイル離れたところで、週末以外の日は、私たちは町に住んで、叔母に面倒をみてもらいました。その年ではっきり覚えている事件は一つだけです。それは隣の女の子の人形を壊してしまったことです。私たちは仲良く遊んでいたのですが、説明がつかない衝動にかられて人形を歩道に投げつけ、人形は粉々に壊れてしまいました。友達のお母さんは私を呼びつけました。どうやって説明することができたのでしょうか。もちろんできませんでした。自分でもなぜそんなことをやったのかわからなかったからです。私は自分を恐ろしいと思い、プライドも傷つけられました。私は自分の意思に反して、全く意味がないことをしてしまったのです。このことは夢のなかに何年も出てきました。

次の二年間、母はミズーリー州で教師の仕事をしました。汽車での旅は新しい経験で、その時の窓からの景色について書き留めたノートを今でも持っています。書いた内容は以下のようなものです。「ミシシッピー川からお日さまがこんな風が上がってきました。」太陽はチョークで赤く塗られていました。詩も含まれていました。でも、その頃私が持っていた詩のお手本はひどいものでした。“Child’s Book of Verse”「子どものための詩」の本を持っていたのですが、子ども向けのへたくそな詩しか載っていませんでした。字を読めるようになってからは、「7歳の時、とにかく手当たり次第に何でも読みました。」祖父の家で見つけたジーン・インガロー (Jean Ingelow) という作家がお気に入り、特に好きだったのは“Bregenz”「ブレゲンツ」と“The Judas Tree”「ユダの木」でした。

幼児期に私はいろいろな障害に見舞われました。私の聴覚障害は、幼児期のときはしかに因るものでした。5歳になるまで、私が他の子と同じようには聞こえていないことを誰も知りませんでした。みんなは、私がわざと返事をしないのだと思っていました。それも確かに事実でした。言われてすぐ返事をすると1ペニーもらえたものでした。そして私は通常、1ペニーを得ることができました。しかし、この頃私の聴力はかなり悪く、医者は私の扁桃腺を取るなどして、鼓膜に支障がないようにしようとしました。さらに幼児期に私を悩ませた病気は、吐き気を伴う発作でした。いつ頃からこれが始まったのか、誰も覚えてはいませんが、父が死ぬ前はありませんでした。2歳か3歳の頃から、生理が始まるまで、私は常に痲癢を起こしていました。そして7~8歳ぐらいまで、ほとんど周期的に起きるようになっていました。6週間一回位、これが起き、不思議なことに生理が始まって最初の10年位は、生理のリズムも同じ

6週間のサイクルでした。生理によって痙攣がなくなりました。子どもの時、生理痛がひどかったのですが、生理が始まると、1回も痙攣は起こりませんでした。

発作の間、ベッドに横たわり、2日間位、嘔吐を続けました。このような憂鬱な状況に陥った時、私はそれを受け入れ、あまり不平も言わず、おとなしい病人でした。3日くらいで、ようやくベッドに起き上がることができるようになり、やわらかい卵料理を食べられるようになったときは、やっと回復したサインで、この日は、他のどんな健康な日々よりも嬉しかったのを覚えています。

痙攣の発作もこの間ずっと続き、ひどい時には嘔吐をしました。しかし、嘔吐と痙攣を結びつけることはありませんでした。この二つはあまりにも異なるものに思えました。どちらにも共通するシンボリズムは、「否定」ということかもしれません。

子どもの頃にタブーとし、それを生涯のほとんどを通してタブーとしてきたことが2つあります。かなり小さい頃から感じていたことで、6歳の秋に牧場を去る前に植えつけられたものです。1つは人の前で絶対に泣かないこと。人の前で泣くということは、私にとって最悪のことで最も屈辱的なことでした。痙攣がおさまって、暴力の罪が「私」の世界のなかのすべてのタブーを圧倒した時に人前で泣いたとしても、それ以外の時に決して泣くことはありませんでした。でも夢の中で人の前で泣いていました。人前で暴露される典型的な夢は、よく知っている顔ぶれの人たちが、じっと私を見ている部屋のなかで泣き出してしまう状況を詳細に表わした夢でした。このタブーは結婚したあとも、頑なに長い間守り続けました。そのころ落ち込んでいる時に、それまで経験したことがないような、素晴らしく美しい白昼夢を見ました。「白昼夢」ということは、どんな夢よりも現実味を帯びた、特定の夢を指しています。タブーに対するそれ以降の変化は、その白昼夢につながっています。その夢のなかで、私は砂漠のなかについて、その砂漠には素晴らしいエジプトのスフィンクスがありました。そのスフィンクスの顔にあらわれた知性と皮肉は、言い表せないもので、私はスフィンクスに近づき、前足に顔を埋めてひたすら泣きました。うれしさと確信を感じながら。そしてスフィンクスの前足は、子猫のように柔らかく、ふわふわしていました。「私」の世界の前で泣くことによって、その後、そのタブーを守らなければならないという衝動は無くなりました。

子どもの頃のもう一つのタブーは、苦痛を表現することでした。7歳か8歳の時、ミズーリーにいた頃、歯が痛くて一晩中眠れませんでした。でも誰も呼びませんでした。5歳の時、台の上から飛び降りて足首を捻挫して気を失ったのを覚えています。でも誰にも見つからないように、そして自分の苦しみを知られないように干草のなかに這って行きました。牧場でお茶碗

を洗うような年齢になるまで、これらのタブーについて、はっきり覚えています。9歳か10歳の時、家には絶えず13人か14人いました。私の仕事は朝ご飯と晩ご飯の皿洗いをすることで、マジョリーは洗った皿を拭く役目でした。後にも先にもその時ほど疲れたことはありません。みんなも私と同じ位疲れていることが、何てひどいことだと思いました。疲れきって泣き出さないようにするには、二つのやり方がありました。一つは棚に水を置いておいて、のどにこみ上げてくるものを押し流すことでした。もう一つは、お手洗いに行き、涙が乾くまでそこにいることでした。食器を洗ってから屋根裏に行き、私は一人で泣いたものです。でも人前では決してそのことを口にしたり、その役目からおろしてもらうように頼んだことはありませんでした。

今振り返ってみると、これらのタブーも、「幼児体験」に基づいた自分に課した厳しい掟でした。タブーとしていることがらは、自分が拒絶した世界に属するもので、タブーを破ることで、そちらの世界に属することになってしまうと思っていました。これを証明する証拠はある程度あります。それは母親の苦しみを幼児体験として覚えているからです。母がそういったことをしたことが、嫌で堪らなかったにちがひありません。私が6歳の時、牧場を去る前に、母は歯の治療をしました。母は痛みを表現することに対するタブーをもっていませんでした。それに対する私の感情は、屈辱に近いもので、嫌悪を抱きました。14歳になった時にも、母が熱い飴で火傷をした時、私は嘔吐をしました。それは母の痛みに対する同情ではなく、母の苦悩を訴える声に対して気分を悪くしたのです。

ミズリーで2年過ごした後、母は共学の学校の「女性校長」になるためにミネソタのある町に移りました。そこで初めて、人が私の人生のなかでリアルな役割を果たすようになりました。完全にリアルではなかったのですが、私の人生の一部を占めるようになりました。学校で私は小さなエリートグループのリーダーになりました。たまたま先生方の子どもはみんな女の子で、グループに入れたのも女の子だけでした。男の子は全く関係がありませんでした。しかし、そのころ一番温かい気持ちで覚えている人は、学校の用務員でした。その人は40歳くらいの顔の整った人で、私たちに紫色の色鮮やかな表紙を作ってくれたものでした。でもその後、なぞの理由で辞めさせられ、その時は理解できなかったのですが、幼い女の子を誘ったからということでした。私にはとてもやさしく、知っている人のなかでいちばん心が温かい人でした。私の髪をなでてくれることで、私への好意を確かめるのが好きでした。

丘の向こうの空想の友達と遊ぶのを止めてから、私の世界は聖書から作り上げたものになっていきました。私は教会のなかで育てられました。大好きな祖父はバプティストの助祭で、信者のなかの中心的存在でした。教会と日曜学校に行くのは当たり前のことでした。にもかか

ならず、私の宗教的な生活は規制のキリスト教や教会の信条とは無関係でした。私はキリストの物語が大好きで、10歳になる前に、牧師よりそれについてよく知っていました。壁のキリストの絵は、私の父親だと思っていました。そして自分の感情のなかではそれを信じ続けました。イエス・キリストの話は私の世界でした。聖書その部分が、自分が読んだどの本よりも好きでした。自分がどの程度わかっていたのか、ひも解くことはできませんが、その生き方は私にとって腑に落ちるものでした。逆に、母の世界は私には理解できませんでした。私は宗教を、家族を支配させることと結びつけることはありませんでした。それは、宗教を信条と結びつけなかったのと同じで、宗教的に従わなければならないという気持ちはありませんでした。宗教に対する疑問は浮かんできませんでした。ゴスペルは生き方を表わしており、キリストはその生き方をした人でした。教会は祈ることを私に教えてくれ、私は文字通りそれを行ないました。祈ることは、丘の向こうにいる空想の友達よりよかったです。その友達とさほどの違いはありませんでした。キリストは、私のお気に入りの相手でした。私が知っているほとんどのことは、聖書から学びました。性交の体位や精液についてすべて知っていました。生理以外のことは聖書の物語で学び、私が知っている最高のものを含む偉大で、素晴らしい現実の一部でした。

にもかかわらず痲癩は続きました。それは、私の人格に対する外部からの攻撃で、悪魔が私のなかに舞い降りてきたように思えました。その頃には、体格は成長し切っていました。11歳の時には、今と同じ背の高さでした。母は私がマージューリーに怪我をさせるのではないかと、前にも増して心配しました。バッファローに引っ越した年、私は11歳でしたが、特に異常な年でした。その頃には毎日のように発作が起きていました。特にひどいある週などは、母はできることはすべてやるしかありませんでした。寝る時に発作が起きたのです。夜遅かったので、発作が鎮まった後、泣き疲れていました。母が厳しい口調で、私に約束をさせました。もう絶対に痲癩をおこさないことを。私はそれを彼女の後に繰り返しました。母が部屋を出てもどってきた時には、ろうそくと聖書を持っていました。その後、エホバの助けを乞う部分を私に読ませました。その後、疲れ切って眠りに入りました。それから二度と発作は起きませんでした。痲癩を寄せつけない力がついたのではなく、その日から今日まで痲癩を起こしたいという気持ちが起きなくなったからです。

痲癩の後に現われたのは憂鬱でした。一年ほど前によく考えたのですが、それまでは生理が始まった最初の年から憂鬱が始まったと思っていました。しかし実際には、生理が始まったのは翌年でした。私の考えでは、痲癩も憂鬱も同じものの二つの表れと見なし、それぞれがもう一方に取って代わっただけなのです。そのどちらも私は「悪魔」と呼んでいました。今日まで気がつかなかったのですが、私はこれまで痲癩について語る時に使っていた言葉を、憂鬱にも

使っていました。どちらも私の「理想郷」から引きはなすもので、どちらも罪なものだったのです。それは私には罪なことだったのです。その頃は、自分が鬱状態にいるのを好んだり、鬱の状態に浸るといったことはありませんでした。憂鬱と痲痺は、私の美しい世界には反しており、自分の世界ではないもう一つの世界では、好まれなくても受け入れられているものでした。

この頃、私は誰に対してもあまり強い感情をもつことはありませんでした。私は冷たい少女ではなかったと思います。母や妹を守りたいという気持ちはありましたが、この世は知らない人たちがあふれる、まったく異質なところでした。人に触られることに対して非常に「敏感」だと思われていました。マミーおばさんがまだ私がほとんど走れない私をからかいたい時、私を抱くふりをして、私は椅子やソファの後ろに隠れて逃げ回ったものでした。私が覚えている場面は、ジャスティンおじさんがいる場面です。ジャスティンおじさんは父のおじで、原理主義者で、トレモント寺院のバプテリスト教会の牧師でした。身体が大きく、うぬぼれが強い人で、私が彼を嫌った理由は、いつも母を悲しませたからだと思います。(彼は神からのお告げでは父が死なないと言っていました。) 家に来た時、彼はいつもひざまずき、家族と祈りました。私は母が泣き始めるのではないかといつも心配していました。ある時、彼はマージェリーにキスをし、彼女に50セントあげました。そして私にも50セントをくれようとしたのですが、私は怖くて部屋から部屋を逃げ回り、最後はミシンの踏み台のところに隠れました。

子どものころ、自分の身体的、感情的な壁を突き破った人は一人もいませんでした。だれも決して私の世界には入って来なかったのです。この頃私は、奇妙な威厳と気高さをもった人たちが住んでいる空想の世界を想像し始めました。彼らは歩くのではなく、地面すれすれのまっすぐの線を滑るように動きました。これは後にブレイク (Blake) の人物が動くのと同じだと知りました。そして彼らは素敵な丘の上に住み、私は彼らを見にそこに行くのでした。彼らの顔に見覚えはありましたが、それが誰かということは、気にとめませんでした。私はこの世界を好きな時に呼び起こすことができ、それに取り付かれてしまっているわけではありませんでした。そして大きくなるにつれ、そこにブレイクの人物を加えたり、システーン教会の天井に書かれた人物を加えたりしました。でもその世界には自分の知っている人はいませんでした。

私が距離をおいている世界以外のところにいた最初の人は、奇妙なことにメープル・ドッジでした。私が14歳の頃彼女は私より5歳か6歳年上で、まだ未婚でベッカー家に住んでいました。ベッカー家の一番下の娘は、私に対してロマンチックな感情をもっており、私に尽くしてくれた最初の一人で、私は彼女のお姉さんの友達ともよく家で会っていました。メープル・ドッジは何かを求めて生きており、彼女が求めているものを私は理解できました。それは私のまわりのほとんどの人たちが持っているものとは違うものでした。彼女は私の存在さえ知らな

ったと思いますが、私は彼女に対して何の感情も持たなかったにもかかわらず、彼女の鮮明なイメージは頭にありました。

子ども時代を通して、温かい人間関係はほんの些細な役割しか持たなかったのも非常に特徴的なことです。私は誰かに愛してほしいとか、選ばれなかったことが悔しいとかいった感情を持った記憶はありません。人に好かれようといった考えは全く持ちませんでした。自分を主張しようと思ったり、リーダーではないことに劣等感を持ったりするようなこともありませんでした。オワトナで私はリーダー的存在で、バッファローでは全くそのようなことはありませんでしたが、そういったことは私には全く関係ありませんでした。

同じように大した役割を持たなかったのは物質です。特に興味深いのは、子どもの視点からみればオワトナではほしいものすべてを持っていたのに、11歳にバッファローに移ってからは本当に貧しかったことです。この違いは、母の収入の違いから生じたものではなく、教会での生活状況や知人の経済的状況と関係がありました。また確かに給料が少なくなったということもあります。母はミドルウエストにいた時にしていた教員の仕事と比べると、多くのスタッフを管理する司書の仕事の方が安定しているということで、司書の仕事を選びました。司書の給料は毎年決まった額で増え続けるという保証もあり、仕事も定年になるまで辞めさせられることもありませんでした。彼女の給料は1ヵ月60ドル、つまり1週間で15ドルになりました。それで家族4人を養っていました。1ドル50セントの一つの帽子が欲しくてたまらなかった時の、極めて特筆すべき日のことをよく覚えています。毎年、私か妹かが新しいコートを買うことができました。必要最低限ではない出費は、マージェリーの絵のレッスンの費用だけだったのを覚えています。母がいまだに私たちに感情を込めて話してくれるのは、マージェリーが友達の家でごちそうになった肉のことです。「それは外側が茶色で、中が赤くてとってもおいしかった。」妹はローストビーフを見たことがなかったのです。

自分の服装や自分たちの貧しい状況を意識するなどといったことはありませんでした。ずっと後になって高校を卒業する時、午後のパーティーに着ていくのにふさわしい洋服の選び方がわからなくて白いのを着てしまった時恥ずかしい思いをしたことがあります。私は白い服を選んだのですが、その頃白い服は日中に着るものではありませんでした。それでも、自分たちが貧しいために筆筒のなかに服が少ないということで反発心を持ったというような記憶はありません。

バッファローに引っ越す頃までに、私たちは自分で服を作っていました。型紙を使って、「ボックスひだ襷」を作るのは本当に苦手でした。マージェリーはお人形の服を作ることでそれを学び

ましたが、私にとっては人形が何を着てようがどうでもいいことでした。マージェリーは一度私の人形をかわいそうに思って、人形のためのドレスを作ってくれたこともありました。でも私は余計なお世話だと思いました。マージェリーと同じように下着をつけるのがあたり前に思われる年齢になると、私はそれが苦痛でたまりませんでした。家族はそのために苦しんだに違いありません。でも、生地を無駄にしたりすることなく、ある程度家族の期待に応えました。家族は私には器用さなど期待していませんでした。器用なのはマージェリーでした。不器用な点では、私の字も同じでした。マージェリーは丸くきれいな字を書き、私の字はまるで金釘流でした。

バッファローに行く前から私は「物書き」をしていました。ある夏の日、オワトナから帰って牧場の家にいた時、ウィルおじさんが私の儲けを数えていました。彼は私が10点ノートに書き取ったら、1ドルくれると言いました。何を書いたかは覚えていませんが、大きな誇りと責任を感じたのを覚えています。母は子どもが書いたものに対して、子どもだからといって甘やかして、誇張した値段をつけるのはよくないと思ったかもしれません。しかし、その頃私が感じていたマージェリーの器用さとうまくバランスをとるためには仕方ないと思ったのかもしれません。バッファローでマージェリーが土曜日に美術学校に行き始めると、私は家で文を書いて母に見てもらいました。4月の吹雪について書いたのを今でも覚えています。それはこんなふうが始まります。「春の日差しの日々を通して、お日さまは地球と交わり、毎日とてもとても素敵でした。」それは詩のような拍子であったことがとても気になりました。でも他にどのように表現したらいいのか分かりませんでした。この頃までに、私はかなりの本を読んでいました。ディケンズ、特にデイビッド・コパーフィールド、そしてスコット、特に「アイヴァンフォー」。でもそこから学ぶことは特にありませんでした。この時期までに読んだ本で聖書に優る本はありませんでした。ルツ（旧約聖書の一書）の話はラモーナより良く、ジョブの詩はロングフェローより良いと思いました。今でも最初の聖書を持っており、それは注意深く赤と黒の線が引いてあり、一所懸命に書いた文章のページがはさまれています。バッファローに移った時からマージェリーと私は教会に行くと、週に5セントもらい、日曜学校で聖書の3節を1日におぼえ、日曜日には6節おぼえると1ペニーもらえました。私は何十もの章を暗記しました。「エバンジェリン」と「ヒアワサ」の詩は高尚なものだと聞いていましたが、私はあまり好きではありませんでした。

聖書をおぼえるというこの習慣から、詩を学ぶことを考えついたのだと思います。マージェリーと私はいつも皿洗いをしていたのですが、私はお皿台の上に置く布でカバーされた棚を作りました。私は詩を書きとって棚にくくりつけ、お茶碗を洗いながらそれらを声に出して読みました。「サナトプシス」、「水鳥さんへ」、「ひばりへ」そして「西風への歌」、「夜の精、速く波

の上を歩け」などの詩を選んだことをおぼえています。

伝記はここで終わっている。彼女の幼い頃の経験を通して感じていた矛盾や理不尽さ、価値観や倫理観は、後の人生にも変わることなく、そして彼女の異文化に対するまなざしにも投影されているように思える。

2 章

Anthropologist at Work は第1部から第6部で構成されている。この本の構成の方法についてミードは次のように書いている。「これは推理小説ではない。どこから読み始めてもよい。もうすでに終わった人生というのは、その人生のなかの様々な出来事を同時に見ることができる。そのなかの一つひとつが後のことを照らすこともあれば、前のことを照らすこともあり得る。……私は、この本で読者の様々な好みに合うようにアレンジした。最後のページを先に読みたい人もいるだろうし、他の人の解釈を読む前に、自分で生の資料をもとに解釈することを望む人もいるだろう。資料はいくつかたまりで提示されている。伝記によくあるように、途中で切られた文章や詩の断片などは折り混ぜられてはいない。なぜなら、ベネディクトも私もある程度のかたまりで資料が提示されなければ、パターンや流れがわからないと信じていたからである。」(A.W. 2) 従って資料と詩とのかかわりも、ミードのコメントと必ずしも一致するものではない。ミード自身も章と詩の関係は、彼女がひらめいた場合にのみ一緒に提示している。1部ではベネディクトと文化人類学との出会いを、マーガレット・ミードの解説をもとに書かれている。年代は1920年から30年代のものが中心となっている。この章には言語学者であるエドワード・サピアとベネディクトとの1922年から1923年にかけての往復書簡やベネディクト自身の日記も含まれており、初期のベネディクトの想いを知る上で重要な箇所となっている。

1部のベネディクトが文化人類学を始めた頃の論文「平原インディアンの幻視」を翻訳して感じたことは、論理的、科学的、そして明確に説明するという態度は感じられるが、その表現からはそのスキルはまだ確立されたとは言い難い点を感じ取れる。表現はどちらかというところ古めかしく、客観的にそしてアカデミックに書こうとする試みは理解できるが、彼女自身のスタイルは未だ形成されたとは言い難く、読み手にとって理解を複雑化させていると感じられる。

しかし、「ポトラッチ」や「カニバリズム」「粘土のカップ」といった重要な概念についての論文、ことに「粘土のカップ」は1934年に出版された『文化の型』のなかの一部にあるが、これらの論文から感じられるのは、一見するとオブスキュアに見える箇所もあるが、ネイティブ・アメリカンに寄り添った、そして彼らの気持ちを汲んで、あえて彼らの言葉に付け加えることなく、彼らが話すように書いたのではないかと推察される。

また1部にはベネディクトによる1923年と1926年の日記も含まれている。サピアとは家族の付き合いをしていたようで、サピア夫人ともまたサピアの子どもでもあるヘレン・サピアとも遊んでいた様子が書かれている。ベネディクトはすでに結婚もし、文化人類学の父とも言われたコロンビア大学のボアズのもとで学んでいたが、その将来は不確実な要素もあった。つまり女性がポジションを得ることの困難さを痛切に感じていたことが理解できる。彼女はコーネル大学で教鞭をとっていた生化学者であるスタンレー・ベネディクトと結婚生活に入っていたが、それが逆にフルタイムの仕事に就ける可能性を少なくさせていたとも言えよう。今日ではあまり考えられないが、当時のアメリカにおいて、女性にとっては、ことに結婚をしていることでポジションに就ける可能性も低く見られたようである。しかし、文化人類学の研究を通しての仲間が増え、それに伴って活動範囲の広がりの様子が窺い知れる。

サピアとベネディクトの1922年から1923年の往復書簡の一部もこの1部のなかに含まれており、彼女の研究者としての足跡を知ることができる重要な箇所である。「ベネディクトさんへ」で始まった往復書簡は、「やあルース」へと変化していった。文化人類学、特にネイティブ・アメリカンの研究が彼らのトピックの中心であり、お互いに論文を送り合い、時にはサジェスションや批評なども書いている。そして二人の関係はもっと密なものへとになっていく。

また1部には1922年から1923年のベネディクトによる日記も含まれている。この時期はベネディクトにとってもミードにとっても重要な時であった。ルースが有能な化学者スタンレー・ベネディクトと結婚したのは1914年であった。しかし、彼女は子どもを産むことができず、次第に鬱に陥っていった。そしてニュー・スクールを通して文化人類学に目覚めていったのである。1922年～1923年という期間は文化人類学の研究者として歩みはじめた初期の頃であり、彼女が悲しげに、そして微笑みながらよく言っていた言葉は印象深いもので、「私は職を必要としないほど強い心を持っていないわ」であった。(A.W. 3)

当時女性として生き方を模索していたルースは、結婚はその空虚を一時的には充たしてくれるものとなった。しかしそれも長くは続かなかった。日記には彼女の鬱々とした気持ちが綴られている。1923年3月8日の日記である。(A.W. 4)

論文を終えて郵送した。文化人類学の学部内でゴダードとランチ。ゴダードとペルーについての授業のため、博物館へ行く。ゴダードはいい助けになる。街へ行って、スーツを買った！疲れた——疲れすぎて劇場が始まるまで待てない。家に帰って *Many Marriages* と *Faint Perfume* を読んだ。魂が揺り動かされるのは凶器に近い苦痛だ。何をしても、苦痛はたえず私につきまとう。自分の選択肢のなかから苦痛を排除することはできない。鋭い意識を恐れる。それなのに、それはうんざりするほど頻繁にやってくる。今日も発作が起きた。図書館の地下の郵便局で切手を買っている時人生なんていうものが存在すること、そして他人をみてその人たちを意識することができる

なんて自分の力が信じられなくなった。——すべては万華鏡のなかの点や線の配置に過ぎない。*Many Marriages* をまた読んだ。うんざりせずにいられるのはこの本だけだ。人生がすぎていき、私は一日一日を無意識に仕事で埋めていくだけだ。——ああ、私はさびしい。

Many Marriages は1922年頃に Sherwood Anderson によって書かれた著書と思われる。一人の男性の複数回にわたる結婚が中心テーマであり、当時あってはよく読まれたものであったようだが、私小説的なもので後にはあまり芳しい評価はなされなかった。ルースは結婚はしたが、子どもを産むことは肉体的にリスクを伴うことが判明していた。大学では授業を持っていたものの、フルタイムの仕事には就けず、生き方を模索していたルースの当時の様子を垣間見ることができる。結婚生活にも、そしてキャリアにもさしたる希望が見出せないルースは、パートタイム的に文化人類学の学部内での仕事をたんとこなしていったが、その日々にも精神的な疲れがみえる。1923年3月17日の日記には次のように書かれている。(A.W. 5)

午前中、テキストの仕事をした。ベッドフォード・ヒルズに出かけた。お昼ごろ、前方にサピア博士が見えたが、彼がこっちを向くかどうか、急にどうでもよくなった。彼は自分の方を見なかった。そして電車に乗った。今日はスタンリーの誕生日、彼は6時に出て行った。今夜は峠だ。もうもとは戻れない。本来なら彼はザイツレンズがついた素敵なコダックをもらったので楽しくなるはずだが。

スタンレーとルースの結婚生活は表面的には体面を保っていたようだが、実質はすでに破綻していたようである。1921年、ルースが34歳の頃、ボアズの指導下で学位をとるためコロンビア大学に通い始めた。「当時の彼女の私生活は、とうぜん困窮していた。週に5日はコロンビア大学近辺の一室で寝泊りした。これは週末しかそのアパートをつかわない教師から借りたものだった。経済的ではあったが、窮屈な取り決めだった。週末はベッドフォード・ヒルズの小奇麗な棲家に帰って、スタンレーと一緒に過ごすのだった。しかし、彼との意思の疎通は年々むつかしくなっていった。」(ミード：1977：36) 上に示したルースの日記にあるベッドフォード・ヒルズはルースが週末だけ帰っていたスタンレーとの生活をともにする家だったのである。だが事実上、結婚生活はうまくいかなくなっており、彼女はキャリアを求めるとともに、自分自身の居場所を求めて彼女は模索していた。ルースは学問を通しての輪が大きくなるにつれて、自分の活動の範囲も広がりを見せていった。そういった折に、より密接な関係を築いていったのがミードであった。

ルースはマーガレット・ミードより15歳年上であった。そしてルースと最初は師弟関係であったが、二人が急速に親しくなったのは、ミードの卒業後であった。師弟から同僚、友人から

親密な関係へと変化していった。ルースの詩のなかでミードとの関係を示すものを見つけることは容易ではない。しかし、1924年に書き、サピアにそれが送られ、それに対する批評がなされている詩がある。タイトルは“*Our Task is Laughter*”と題するもので、この詩はサピアに送られた後に手が増えられ、修正されたものが1926年の*Palm*誌Ⅲの6号に掲載されている。ここで紹介するのは、修正前のものでサピアに送られたものである。（A.W. 6）

私たちがなすべきことは笑いとばすこと

そんなふうにレッテルを貼られたことに対して泣かなくてもいい
彼らが安全に仕舞い込んで、慈しんでいるものが
私たちをまだつなぎ止める半分も価値があるだろうか。
ここでは手をのばせば幸福がある。
旧いおきて以上のことを知らない人々、
接吻の罪悪を味わったことがない人々から
彼女が愛する非常識さを隠す鎧を脱ぎ捨てる。

私たちがなすべきことはそれを笑いとばすこと
笑いの深い意味を心に持つことを学ばねばならない
こっけいな究極的な芝居を笑いとばしながら
私たちの年月を織り成していかねばならない
腐った年月から偉大な知恵を掻きだせるのは
私たちの他に誰がいるだろう？
地球の二つの半球を誰が受け継ぐのか？

上記の詩に対するサピアの批評は二つの点に絞ることができよう。一つは詩作についてのテクニカルなこと、たとえば、音がぶつかることや用語についてである。もう一つは内容に関することで、サピアは次のように書いている。（A.W. 7）

……このようにプライベートな内容に関してアドヴァイスするのは危険です（！）でもあなたは反抗することによって気持ちを落ち着かせようとし過ぎているような気がします。自分の気持ちを表現できないこと、そしてそれに対する苛立ちの影響が見えすぎます。あなたの詩のなかでいつも「こうしてはいけない」、「こうしてやる」というのが交互に現れています。これを続けすぎると、行き止まりにしかたどり着きません。あなたが本当に必要としているのは、原則がある遊びなのではないかと思います。

自分を少し追い詰めすぎではないですか。もっと柔軟な良心を持つようにはできないのですか。あるいは、良心を全く持たないようにはできないのですか。少し気を緩めて、自分が好きなことをやってみたらいかがですか。「私たちのやらなければならないことは、笑いとばすことです。」というのは変な感じがします。もう少し心の歯車をゆるめても、あなたの詩の鋭さは消えませんよ。怖がらないようにね。……

しかし、1929年4月29日のサピアからベネディクトに宛てたこの手紙の前段にはもう一つ重要な意味が含まれている。「……あなたが私の書いたセックスの記事が気に入らないだろうということはわかっていました。だからあなたにコピーを送るつもりはなかったのです。なぜなら二人の埋めることができない違いによって、私たちの関係が無意味にもつれてしまっほしかなかったのです。しかし、あなたが私の論文からの引用だといわれていることに対して激怒したということは、今までにないくらい私を驚かせました。あなたは私のことを信じていないようですが、セックスに関する論文を書いた時に、あなたのことは全く頭になかったことは事実です。それにこの論文はハリー・スタック・サリヴァンの要望でしぶしぶ書いたものです。……」ここでサピアが述べている論文だが、彼はセックスに関して2編の論文を書いている。2編のうち1篇は明らかではないが、もう一つの論文は、次の論文である。(Edward Sapia: "Observations on the Sex Problem in America", *American Psychiatric Association* Vol.85, No.3, 1928年11月1日) この論文に対してベネディクトは非常に気分を害したようである。(A.W. 8)

ここで問題となっているサピアの論文の一部を紹介する。

……男女間でお互いに好感をもつということが奨励されていないので、人々は極端に走る。うんざりするほどそういった例は増えている。それを補足するために、つまり男女間で得られない情熱を満たすためにホモセクシュアルが増えている。これはアメリカでは確実に増加している。セックスから愛情が追い出されたような状況では、不自然な形をとることがある。ホモセクシュアルが普通だと主張するような人たちは、自分たちの問題を正当化するが、そんな主張には誰もだまされない。彼らは自分たちの問題を正当化しようとしているにすぎない。…… (Sapia : 1928 : 519-534)

ベネディクトが立腹したのは、サピアのこうした考え方であり、またそれを公表したということに所以していることは間違いないだろう。サピアが本論文を通して訴えたのは、セックスと恋愛、愛情との結びつきが希薄になり、個人の性的快楽を得る権利が強くなっている。そうになると、セックスの役割とは何かがわからなくなる。そのため色々なセックスの試みをする人がいる。しかし、そうしたことは退屈凌ぎの冒険者たちでしかない、ということであろう。こ

の時代、セックスを扱う学者は心理学の専門家が中心であった。しかし、エドワード・サピアは文化人類学者として、社会のなかのセックスの位置づけを論じていることは特筆すべきことであっただろう。サピアは論文を通して、社会現象の一つとしてセックスを扱ったのである。しかし、ベネディクトにとって同性愛の問題、それが社会問題として触れられることは、特に長年の友人であり、おそらく薄々はベネディクトの状況を知っていたと思われるサピアからは聞きたくないことであった。

ルースがこの詩を通して訴えかけたのは、マーガレットとの関係も含めて、その当時アブノーマルだと考えられていたことに対して、言うならば世間の絶対的な価値観に対する挑戦的な詩ではないかと思われる。地球は二つの球体から成り立っており、両方が存在せずには球とはならないのである。おそらくもう一方の半球について語ると受け入れられないだろう。それに対してなすべきことは「笑いとばすこと」である。世間において起こり得る反応の認識として理解することができるのがこの「私たちがなすべきことは笑いとばすこと」と考えられよう。世間の批判に対する答えは、笑いとばすことである。それが、ルースが書いた「笑いの深い意味を心に持つことを学ばねばならない」の件であろう。1926年という年はミードにとってもルースにとっても重要な年となった。ミードは後に議論を呼んだあの有名な『サモアの思春期』を書き、二人は「アブノーマル」について本腰を入れて研究を始めた。そうしたベネディクトの考えに対してサピアは理解することはできなかった。

女性史を専門とし、ベネディクトやミードについての論文も多いマーガレット・カフリーは1920年代のアブノーマル、つまり「枠外の人」について次のように述べている。

1920年代半ばあたりから、不適応者の研究は、一般的に社会学のなかで重要な問題となった。社会学は「欄外の人」を研究した。心理学者と精神分析学者は、精神的に人間が社会の階段を踏みはずす方法を見て、「アブノーマル」を研究した。こういったすべては、個人とその文化の間に相互関係があること、そしてどの程度の影響を各人が他に及ぼしているかを理解しようとする一般的な努力から生まれた。そしてそれ以上に、近代的な見方と取り組んでいる人々にとって、諸個人、特に不適応者は、天才か犯罪者か移民か、それとも多数の価値システムにしばられない少数か、社会のなかで、でたらめの要素を構成した。すべては社会への、予言できない肯定的、あるいは否定的な効果を生み出す効能性とカオスを生じさせる可能性を持っていた。ベネディクトは、不適応者の研究を自分に合ったものだと思った。彼女自身、子ども時代からアメリカ社会において、不適応者と感じていたからである。……

1926年の秋に書かれた『サモアの思春期』の第二章「戦う少女」は、サモア社会における不適応者を扱った。……ミードが後に書いているように、「ルース・ベネディクトは

私に、これを尋ねるようと教授していた質問」であった。(カフリー：1993：286)

ルースにとって文化との関わりのなかで「アブノーマル」をとらえていくという方法論はチャレンジするに値するテーマとなった。そしてこの視点は生涯を通しての彼女の著作にも貫かれていくことになる。

1926年秋に書かれた「サモアの思春期」の第二章「戦う少女」は、サモア社会における不適応者を扱った。不適応者とは誰なのか、そしてどのようにその文化にいける「ノーマル」と衝突し、「ノーマル」から逸脱したのかを描いた。カフリーによれば、「ベネディクトとミードは、自分たちの愛を健康的だと考えており、社会から悪と非難されない、それ自体の倫理をもった二者択一の基準として愛する女性たちをみており、異なってはいるが、価値あるものとして受け入れられていると思っていたことは、明らかなようである」。(カフリー：1993：288)

3 章

2部は、ベネディクト自身による自伝とアン・シングルトンというペンネームを用いて書かれた自伝的なもの、そして1923年から1938年にかけての書簡が主たる内容となっている。ペンネームを使うことに関してはサピアのみならずミードからも批判されていたことである。ルースは、1889年から1934年の間、自分の心情を吐露するのに、詩を織り交ぜて誰にも見せない形で書いた時期があった。マーガレット・ミードによれば、人間関係においても、ベネディクトはいくつかの世界を持っており、ある部分の世界についてはマーガレット・ミードも全く知らないものであった。それについてはマーガレット・ミードの解説で明らかにされている。

ベネディクトは33歳で大学院に入ったとき、自分の人生を賭けたものではなく、研究は人生のほんの一部でしかなかった。そして30代後半においても、彼女は時折、記していたジャーナルに次のように書いていた。「私は自分のための人生、世界のための人生という二つの人生を生きる力があるかどうか賭けてみた。その結果、自分の人生を語る時、それが文化人類学を始める前の人生、あるいは後の人生を語るにしても、ひとつの観点からのみ語ることは、非常に不完全なものになるのである。」彼女は私たちを別々の部屋に入れて、彼女だけがひとつの部屋からもう一つの部屋に移り、だれも彼女について行って、その様子を記すことはなかったのである。(A.W. 9)

ルースのパーソナリティの一面についてミードは次のように語っている。それは双子のように年齢が近かった妹とは全く異なった側面であった。妹のマージョリーは美しく、また悩みなど感じさせないような明るい性格であった。

ルース・ベネディクトは人生の些細なことを好み、私たち (筆者注: ルースとミード) は何時間もお互いに知らない人について語り、その人たちがどうしてそういった行動をとるのか、またどのように感じているのかを想像した。彼女が語った数多くのなかに、彼女が本当に嫌ったり、恐れるような人はいなかった。自分が他の人と違うということによって、自分のまわりの人に溶け込むことができず、そして他の人が感じる満足感や幸福感を味わえなくさせていると思っていた。彼女が他の人が気付かないようなミスに対して、不適切に大声で笑うことは、彼女の妹によるとルースが他の人の「気まずい顔を見るのが好きだったから」と解釈されていた。(A. W. 10)

こうしたルースの性格は時には学生たちを脅かすことにもつながった。特に、笑いに対しては時として残酷さを孕むようにも感じられたようである。こうした傾向は彼女が教育において指導的な立場になってもなくならなかったようで、エドワード・サピアは1925年のルースへの手紙のなかでそのことに触れている。それはルースが個人のユニークネスについての素晴らしさについて書いたものに反論する形でアキューズしたものである。「心理的不規則性に対する熱烈な愛は、どこか残酷なところがあります。あなたがすばらしいと思っているものは、いつかひどいしっぺ返しをくうのです。それにもかかわらず、黙って抵抗している自然があります。それをあなたはすてきだと言って喜んでいるのです。」(A. W. 11)

彼女がまわりから隔絶されているような孤独感や、微笑といったものは彼女の片方の聴力が極めて悪いということに起因し、それによって強調されることになったと思われる。1章で紹介した詩「私たちがなすべきことは笑いとばすこと」も、彼女が感じた「他とは異なる」ということに所以するもので、そうしたことに對して彼女が取り得るリアクションはただ「笑う」ことだけだったのかもしれない。こうした孤立感を彼女は詩作によって解放しようとしていた。ルースはいくつかのペンネームで詩を書いたり、女性史の研究もしたりしていたが、親しい関係にあったミードにも秘密にしていた。ペンネームを用いることについては複数回にわたってサピアから苦言を呈されていた。1924年にルースが送った詩に対して、「ところで、ペンネームは使ってはいけませんよ。自分を守るための色づきのトリックはやめなさい。自分の良心を失うと考えるなら、面の皮を厚くしなければなりません。」また1926年には「自分の作品から距離を置こうとするような考えについて、私がどう思っているか知っていますよね。私はそういうことは嫌いです。嘘をつくならはっきりと嘘をつきなさい。嘘をきれいごとで包むようなことはやめなさい。」と言っていた。(A. W. 12)

しかし、彼女の詩に関する興味を活性化させてくれ、お互いに共有するものとした人物はサピアであり、彼との友情は、学問においてはフォーマルなものであったが、次第に詩の交換や、

意見交換へと深まっていったのである。

徐々にルースは二つのアイデンティティを融合させる気になっていき、ひとつの転換期をむかえたのが1925年の頃であった。しかし、それもほんの一時的なことであった。

……いくつかの友情が深まり、相手を信用するというタブーを捨てることになった。しかし、彼女らしく過去は伏せていた。彼女は私（筆者注：ミード）にさえ最初のペンネームは教えてはくれなかったし、メアリー・ウィンストンクラフトの下書きは大切に保管していたにも関わらず、私には絶対に見せなかった。初期の詩のいくつかは少しずつ見せてくれたが、それが出版されたかどうかは言わなかった。……

(A.W. 13)

ベネディクトが幼い頃より抱えていた内なる葛藤についても書かれている。この当時から彼女が当時の社会の常識や規範といったものに対して疑念を持ち始めていたことが窺い知れる。

もともと彼女のなかにはない定められた生き方に出会うこと、アメリカ文化のいかなる側面ともあわないような彼女の性格、このように何かいくつもの人生を歩んでいるような感覚は、絶えず彼女のなかにあった。遠い昔、まだ小さい頃、自分が本当に思っていることを人に言わない方がいいということを学んだ。近所の農園の女中が自殺したとき、ルースの信心深い祖父穂はルースを学校に行かせて、自殺を遂げた偉大なるカトールについて学ばせておきながら、自殺した女中を頭から否定したことがルースに三重の苦痛を与えた。彼女にとって古代ローマ人の自殺は称賛されるにもかかわらず、ニューヨークの北部では、同じ行為がけなされることが納得できなかった。しかし、このことを自分の親愛なる人に言っても、その人たちは自分に反対するだけではなく、その人たちが傷つき、ショックを受けたり、阻害されたりしたような気分になる。世界はそうになっており、どのようなことがあろうとも古代ローマの道徳に合わせるのではなく、現代のアメリカの基準に合わせねばならなかった。…… (A.W. 14)

またサピア自身もひとつの転換期をむかえていた。サピアは日々の文化人類学の事務的なことや大学政治などに巻き込まれ、詩作をあきらめたわけではなかったが、一時期詩に背をむけるようになっていった。1924年末のころであった。

……最近、詩をまともに書いていません。……ワシントンに行かないと聞いて残念に思います。あなたとマーガレット・ミードもおらず、またボアズも少ししか参加で

きないなら、会議は面白くなくなるでしょう。私の言語学の論文の締め切りが迫っている時に、ボアズがいなくなるのはおかしいです。彼のために特別書いたのに。他の人にとってはどうでもいい内容です。でもこういう会議はいつもこんなふうな感じですよ。人生がくねくね曲がりくねっていることを完璧に示す象徴です。(A.W. 15)

1925年にサピアはシカゴ大学で教鞭をとるために招聘され、オタワからシカゴに引っ越していった。彼は言語学の方面に情熱を注いでいた。「……私の人生の序幕は、完全にテクニカルな言語学の探求の砦に落ち込むことによって終わらせるのがいいのではないかと考えています。人間の関心といわれているものの市場から身を引いて、あまりにも地味で、あまりにもはっきりしていて、あまりにも遠いために喜びも失望ももたらさないような幻をとことん追いかける方が、よほど心地よく思います。純粋な数学にどんな意義があるのか、以前よりも増して理解できます。だれもが人間を救うことに携わらなければならないのでしょうか。あなたを決して満足させないでしょう。私は人類を救ったり、助けたりするような願望はありません。ただ、私の人体を動かしているものを、動かすのが嫌になる瞬間まで、自分の生まれ持ったわがままで、自分のことを体系的に忙しくさせていただけです。あなたとマーガレットは人生に多くを求めていて、その分、得るものも大きい。(とくにマーガレットの場合そうで、あなたもそうであることを願っています。) 私の主な仕事といえば、どんどん奇妙になっていく要求が、満たされないことに対する馬鹿げた後悔や、ちっぽけな不満に備えて、自分を鍛えることが自分の仕事です。……」(A.W. 16)

サピアも書いているように、1920年代後半は、ミードにとってもベネディクトにとっても密度の濃い知的共同研究の期間であった。ヨーロッパで二人は会い、船で一諸に帰国した。その後、二人は創造的な共同研究時代を始めることとなった。ベネディクトはネイティブ・アメリカンのピマ族を調査し、それが後のアポロ型——ディオニソス型の文化の型の発展につながっていったのである。

結びにかえて

本論文ではルース・ベネディクトの伝記的なメモワールの全文を1章で翻訳紹介し、2章、3章では彼女が幼い頃から抱えていた当時の絶対的な価値観に対する反発や悩みなどを如何にしてエネルギーに代え、抗いがたい「常識」に対してどのように掉さしていったのか、そのプロセスの一端を考察したものである。彼女が学者人生を賭して闘ったアブノーマルを巡るたたかい、そして文化人類学者として彼女の地位を決定づけることになった文化をパターンとしてとらえる分析法に至るまでを当時の文献などから紹介した。

現在進行中の翻訳は、彼女が文化人類学者として活躍の場を与えられる段階に入っており、今回論文としてまとめたものとは若干趣を異にしている。翻訳完成の際には、ベネディクトと彼女をめぐる人物考察をさらに深めた研究論文にしたいと考えている。

References

- ギアツ・クリフォード 1996年 『文化の読み方／書き方』 森泉弘次、岩波文庫。
- Caffrey, Margaret M. 1989 *Ruth Benedict: Stranger in this Land*. Austin: University of Texas Press.
- M・カフリー 『さまよえる人 ルース・ベネディクト』 福井七子訳、関西大学出版部、1993年。
- Lapsley, Hilary. 1999. *Margaret Mead and Ruth Benedict*. University of Massachusetts Press.
- ミード・マーガレット 1977年 『人類学者 ルース・ベネディクト——その肖像と作品』 松園万亀雄訳、社会思想社。
- H. ラプスリー 『マーガレット・ミードとルース・ベネディクト』 伊藤悟訳、明石書店、2002年。
- Mead, Margaret, *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict*, New York: Houghton Mifflin, 1965.
- Edward Sapia: "Observations on the Sex Problem in America", *American Psychiatric Association*, Vol.85, No.3, 1928年11月1日
- A. W. 1: "The Story of My Life ……," in *An Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict*. pp.97-112.
- A. W. 2: *An Anthropologist at Work*, p.xxi.
- A. W. 3: *An Anthropologist at Work*, p.3.
- A. W. 4: *An Anthropologist at Work*, p.67.
- A. W. 5: *An Anthropologist at Work*, p.69.
- A. W. 6: *An Anthropologist at Work*, p.167.
- A. W. 7: *An Anthropologist at Work*, p.166.
- A. W. 8: *An Anthropologist at Work*, p.165.
- A. W. 9: *An Anthropologist at Work*, p.3.
- A. W. 10: *An Anthropologist at Work*, p.84.
- A. W. 11: *An Anthropologist at Work*, p.84.
- A. W. 12: *An Anthropologist at Work*, pp.182-183.
- A. W. 13: *An Anthropologist at Work*, p.87.
- A. W. 14: *An Anthropologist at Work*, p.83.
- A. W. 15: *An Anthropologist at Work*, pp.168-169.
- A. W. 16: *An Anthropologist at Work*, p.180.

写真提供については一部はベネディクト・コレクション、そして一部はマーガレット・ミードによる *An Anthropologist at Work* から使用させていただきました。お断りとお礼を申し上げます。